

海軍飛行予科練習生時代（二）

神奈川県 安藤 豊 昭

大村海軍航空隊諫早分遣隊から東京航空隊霞ヶ浦分遣隊に転勤を命ぜられ、諫早に十五人（うち一人病死）を残して百五十人の者が隊門を出た。諫早駅より鳥栖駅まで行き、そこで鹿児島から来る列車を待つことになった。戦時中の専用列車は鈍行で諫早を午前中に出たのに、鳥栖駅には夜十一時ごろになっていた。

門司に到達するころ夜が明け、昼ごろ神戸、大阪に停車すると、どう連絡したのかたくさんの家族が乗って来て、次の停車駅までの間にいろいろと台湾の話などで花が咲いていた。

行く先は分遣隊の霞ヶ浦で、そこへはどう行くのか道順が分からず、上野から常磐線で荒川沖駅で降り、そこから航空隊まで歩くことになった。

翌日、兵舎に入った。次の日の朝食は赤飯であ

った。まさか我々の到着を祝って、と勘繰ったのは浅はかなこと、食料事情の悪化で米節約のためアズキを混ぜただけと分かり、内地の食料事情の不足が軍隊まで来ていることを思い知らされた。

そしてこちらに来る車中で我々は、潜水艦の乗組員から『同期の桜』の歌を教えてもらった。これが『同期の桜』を知った最初であった。

「中練特攻」これが私が特別攻撃隊になった時の乗るべき機種で、台湾で散々乗り尽くした九三中練のことである。着いて翌日、全員飛行場に集まり飛行服を着せられて、一人一人順番に中練機の前席に乗り慣熟飛行テストがあつた。その結果、私を含め二十五人が中練特攻要員として選ばれ、他の者はこれから開発される機種のために待機することになり、飛行場の反対側の朝日村に行くことになった。

特別攻撃訓練は当初、昼間から始まり、薄暮となり払暁となった。霞ヶ浦の飛行場は中央に指揮所と格納庫があり、周囲が草っ原でどこに向って

も飛び上れる飛行場であった。連日、夕方起きて夕食や朝食を取り、その日の風の吹き具合で朝日村の方向か他の方向に離着陸するので、小さな缶にボロ布と石油を入れてカンテラを作り、それを

着陸する所に着陸灯として幅三十メートル長さ百メートルくらいに等間隔に置いて、着陸進入角度を指示するために、青の電球の並んだ一メートルくらいの三角の板と、高さ一メートルの台に付けた赤の電球の板の着陸誘導灯を用意し、その日の風の強さによって青と赤との間隔を、風の強い時は狭くし、着陸角度が大きくなるように、弱い時は大きくして、夜間の着陸を容易になるように配置していた。

この誘導灯を着陸時上空から見ると、赤電灯と青電灯が横一線になるように飛行機の姿勢を着陸の五メートルまで保ち引き起こすと夜間でもピタリと着陸が出来たのである。

それは青灯が赤灯の上に見える時は機の着陸角度が高く、赤灯より下に見える時は低いと判断し

てエンジンの回転を早めて機の位置を高い角度に修正して着陸する。この二つのランプと着陸地点の両側のカンテラは当番が皆より一時間早く起きて用意して、夕方明るいうちに並べていた。

特攻訓練は連日夜間であったが、ほとんど台湾で実施飛行教育を済ませているので、夜間着陸を二、三回すますと、すぐに降爆訓練に入った。どの中練機も翼と胴体は、上面は暗緑色の縞模様塗られ、下面は赤とんぼのままで胴体下部に二百五十キロのコンクリートで出来た模擬爆弾を装着していた。

この状態で高度三千メートルから目標に左斜め上反転で突っ込むとスピードが付き、五百メートルくらいで投下動作をして引き起こす。実際には二百五十キロを付けたままの訓練で機首を上げ上昇の操作の引き起こしをしても、機体は沈み、地上すれすれまで高度が下がり、やっと百メートルくらいで水平になることもしばしばであった。その作業で戦友が、地上に激突して殉死した話を聞

いている。

連夜の降爆訓練が軌道に乗って来たころ、我々はB 29の東京空襲で燃え上がる炎で空が赤く染まった市街を機上から見ていた。あの下ではたくさんの人が苦しんでいると思うと、何かじつとしておられない気持ちで闇夜を飛んでいた。そんな夜半突然、「総員起こし」のラッパとともに「総員指揮所前に整列」の号令を受けた。そこには朝日村に行った者を除いて航空隊全員がいたはずであった。すでに特攻隊は編成され自分もその一員であったので、司令が伝達する言葉を緊張の気持ちで聞いていた。

「有力な機動部隊及び多数の輸送船団が小笠原列島に沿って北上しつつあり、その進路からすれば敵の目標は、明朝、九十九里及び相模湾を結ぶ線の海岸のいずれかに上陸する公算大である。特攻隊員は敵の上陸前に特攻をかける目的をもって〇四〇〇に出撃するので、〇三〇〇に現在地に集合のこと。全機爆装、燃料は片道、主計課員は、

三分分の食料を用意確保すること。その他、地上戦闘員は、出来るだけ所有の武器を持って、銃のない者は個人の刀でも、またそれがない者は竹槍を持って、〇三〇〇に現在地に集合のこと。明朝敵の上陸開始予定時刻は〇五〇〇から〇六〇〇の間と思われる。夜明けとともに、艦砲射撃並びに敵機の空襲が激しくなるものと予想される。各自万全の備えをしておくように。以上、解散」

司令は兵舎に戻る我々を見送った。その途中、私のほか何人かが、分隊長に呼び止められて、明朝一番隊として特攻に出撃することを指名された。駆足で兵舎に戻る時、自分はその実、足が地に着かなかった。本当に自分が突っ込む実感が湧かなかったからである。考える暇なく駆足で兵舎に戻る。

午前三時、全員が再び整列をした。しかし特命の整備課、主計課の者は来っていない、自分たちはその場所において次の命令が出る長い時間何を考えて立っていたか覚えていない。ただ無性に小便が

したくて我慢していたことは覚えている。

三時が四時になり夏の朝は早く、もう東の空が明るくなってきた。今か今かと時間が過ぎてても一向に出撃の気配がない。四時ごろには一度中練のエンジンが掛かり「ごう、ごう」と鳴り響いていたが、今は停止している。夜が明けてからの出撃は敵からも目立ちやすくまた何のために夜間降爆訓練をしたかもわからず、これで出撃ならば全滅だと私は諦めていた。

完全に夜が明けてしまったころ、司令が再び壇上に立ち、「先の情報は、偵察機の誤りで、すべての指令は取り消された。しかし敵機動部隊の本土接近の報告もあるので、敵の艦載機の襲来に備えて中練の爆装を解き機体を掩体壕に直ちに退かせるよう。機動部隊の接近による艦載機の空襲は、およそ〇七〇〇には上空に到達するものと思われるので至急にその対策をするように」ということであった。

私は張り詰めた気が一度に抜けてその場に座り

込んでしまった。その時、「安藤二飛曹、何をそんな所に座つとるか」と誰かが怒鳴った。咄嗟にぴよいと立つと、「自分は生きとる、自分は生きとる」と口の中で反芻しながら、駆足で飛行機を掩体壕まで押している現場に着き、夢中になって翼端を押した。そうすることで自分が助かった嬉しさを隠したかったのだ。

特攻が中止になっても、のんびりしてはいられなかった。艦載機の空襲が予想したより遅く昼近くから始まった。その時、敵機の低空飛行を防ぐため揚げた黒い気球も敵機の一連射で燃え上がり、下げていたロープのネットも気球とともに地上に落下したのを見た。

我々の飛行訓練はやはり夜間ばかりだが、六月十日昼間、B 29の大空襲が、我々の霞ヶ浦を狙って低空で多量の爆弾を落していた。爆弾は我々の兵舎に当らずはずれたのだと思っていた。しかしその爆撃は連日一機のB 29による偵察飛行で、飛行場近くの山の中腹を掘って何かをしているとの

想定で、大挙して爆撃したらしかった。

その壕の中では多数の戦死者がでた。我々は多数の戦友の遺体を格納庫に運びお棺に移した。運ぶ最中でも戦死者の体から血が流れていたが、お棺に移してもそこから垂れていた。

艦載機が前にもまして飛来するようになると、航空隊の基地からの特攻は、事前に敵に叩かれるおそれがあることから、中練を疎開させることになった。土浦市の北に仮装飛行場を造り、そこまです中練を空輸する組と、翼を取りはずし機体のみ地上滑走の要領で運ぶ組に別れて、運ぶことになった。

仮装飛行場とは言え畑を地慣らししたのみで、普段には竹や雑木を植えておき、いざという時は抜いて、滑走路にするというお粗末な飛行場であった。その一本の滑走路に空輸組は見事着陸を試みせたという。

私ら地上組は霞空から土浦市街を抜けて飛行場まで翼のない中練を運んだ。尾翼に二人左右に付

き、その二人が方向を決めるために尾翼を左右に押す。私は操縦前席に乗りエンジンを掛けたまま進む。エンジン前の両側に一人ずついて、進む方向の案内をするが、土浦市街では見物人などが前を塞ぎ、予想外に時間がかかった。

何しろ街の中をエンジンを掛けたまま練習機が走り抜けるのである。四、五機並んで、特に登り坂になるとエンジンをよけいに吹かすので、尾翼で舵をとる者は、風圧で大変であった。すべての作業が終わると、もう今晩からは夜間飛行作業は出来ないことに気が付いた。

八月九日、諫早から霞ヶ浦に転勤して来た全員が集められ、千歳基地には特攻組二十五人、美幌組は九十四人、霞ヶ浦組は三十五人に編成替えになった。我々特攻組はそのまま千歳に転勤で、その目的は空襲のない北海道で訓練と後輩の指導などと言われたが、中練特攻はこの日をもって解散をすることになった。

我々が衣囊をまとめ霞空を出た次の日、美幌に

転勤の者たちが発った。転勤で整列して隊門を出て、荒川沖駅より一般列車にて仙台に向った。水戸を過ぎ、日立辺りであったか急に列車が急停車した。とそのとき「敵襲」との声が聞こえた。窓から空を見上げると敵の艦載機が列車目がけて突っ込んで来るところであった。私は窓から飛び降り線路の脇の林の中に走り込んだ。その時機銃掃射の音が聞こえ、やがて機影が消えて隠れていた者が出て来て列車に戻った。

しかし列車は機関車が故障という。七時か八時ごろになってやっとのことで列車が動き出し、仙台に着いたのは夜中の十二時ごろ、そして盛岡に着いたのが昼の一時ごろ、その盛岡の駅で停車中にホームに立っていた民間人から「兵隊さん、もう戦争は終わったんだよ。軍隊は解散して各員は武装を解除して故郷に帰るようにとのことだからもう行くことはないのじゃないのかい。日本はアメリカに負けたんだよ」と。

我々はこのことを聞いて少なからず動揺した。

このまま故郷に帰れるか、それとも目的地まで行き、その航空隊司令の指示に従うのか、道半ばにして国家が百八十度の方針を変えたとき、下っ端の者は迷うばかりであった。

早速その場で全員を集め、今後の我々の行動についてどうするかを決めることになった。この場で解散の声も出たが、まず我々が行けと言われた所に行ってから、その後のことを決めたらと言う意見が多く、このまま続行して千歳まで行くことになった。

青森駅に着くと、連絡船は本日は出航せず、我々は駅のホームで一晩過し、次の朝、函館に渡り、列車で札幌から千歳行きに乗り換え、航空隊の隊門をくぐった。すでに今日は十六日、入隊し転勤報告をして兵舎をあてがわれて荷物の始末を終えると集合がかかった。

そのとき若い海軍少尉が壇上に立って、「貴様らは海軍軍人である。我が海軍は一部陸海軍部の偽りの停戦に騙されてはいけない、我々はまだ敵

を本土に迎えて叩く十分な戦力を持っているのだ」と言い、「国民諸氏に告ぐ、軍ナクシテ何ノ国体護持ゾ、……海軍航空隊司令」「断じて降伏せず、一億総決起の時は今なり、海軍」と書かれたビラを掲げて、再び厚木に戻っていった。

その中、「飛行作業中止」となり、千歳基地全員が指揮所前に集合させられて航空隊司令より、去る十五日、玉音放送以後の海軍のあり方と、今後の我々のやるべきことなどについて訓示があった。

二十日過ぎに軍命令が出て、我々は飛行作業を行う飛行機のプロペラをすべての飛行機からはずすことになった。これで本当に戦争は終わったのだと自分に言い聞かせたのであった。二、三日は飛行場に行つて飛行機のプロペラはずしの手伝いをしたり、燃料を飛行機から抜いたりしていた。

ある日、突然、空襲警報が鳴った、誰かが空を差して「見ろ、あれはソ連機だぞ」と言った。思えばソ連はそのころに千島列島をどさくさに紛れ

て盗み取っていたときである。昼間の作業が終わる兵舎に戻ると、上から我々の所持品で飛行日誌、考課表、写真などを兵舎の裏で焼くようにとの指示が出て、皆が次々に燃える火に書類を投じた。

私は飛行日誌の一部を破いてアルバムとともに衣囊の底に隠しておいた。そのとき、思ったことは国のため国家存亡の危機に一途な愛国心で最後まで戦い抜いて国を守ろうと死んで行った戦友に対し、死に損ねた私はどうすればよいのかと悩んだのであった。

もう我々は何もすることがなくなった。連日「酒保開け」でビール等はケースで持つてきて、もう飲めないのにビンを開けて、デッキはビールが一センチくらい溜まってしまい、ビール、酒、羊羹、パイナップルなど飲み放題、食べ放題のランチ騒ぎのどんちゃん騒ぎが続いた。

九月二日、我々は正式に故郷に帰れることになった。主計課から今までの給料、貯金通帳と現金二千元を受け取り、衣料品は新品と取り替え支給

された。さらに各自米一升持たされ、その上に、トランクの中はパイン缶、カルピス、航空食糧などがぎっしり詰まり、衣囊の中も満杯であった。

北海道は客車であったが、海を渡って青森からはなぜか有蓋貨車であった。我々復員の仲間ばかりが指名されて乗せられたが振動や騒音がひどく、牛馬に等しい待遇だと皆が憤慨し、強引に客車に乗り込んでしまった。盛岡、仙台と次々下りて行く仲間が「おい五メートルを忘れるなよ」と言つて降りていった。

私はこの時点で戦争がまた始まれば、先ず我々が引き出されるかもしれないと心から感じていた。五メートルとは、飛行技術を次の何かあるときまで忘れるなということであった。

列車は福島、郡山、宇都宮と過ぎ、いよいよ関東平野に入った。

【解 説】

体験記筆者は、終戦二年前の昭和十八年一月、

第十三期甲種子科練生として海軍航空隊に入隊、練習教程を終了して実施部隊で学ぶ時には、既に戦闘、攻撃すべき実用機はなく練習機での特攻隊、即ち「中練特攻」要員として訓練、待機することとなる。

この日本航空兵力の転機となったのは台湾沖航空戦といわれている。当時、アメリカ軍はレイテ湾上陸に先だって、沖縄と台湾の主要基地（新竹、高雄など）を爆撃した。そして十月十日の那覇空襲では市街地の九割が焦土と化した。

台湾や沖縄を基地とした日本軍の航空軍を攻撃することによって、米軍のレイテ湾上陸作戦が妨害を受けないようにしたのである。これに対して日本海軍は、アメリカ空母機動部隊にたいして全力をあげて攻撃をしかけた。これが台湾沖航空戦である。

記録によると十月十二日（九十九機、鹿屋と沖縄から）、十三日（二十八機、鹿屋から）、十四日（三百四十機、沖縄と鹿屋から）、十五日（百七

十七機、フィリピンから）、十六日（百四十五機、台湾と鹿屋から）と連日攻撃を行った。

そして大本営は「空母十一隻撃沈、八隻撃破、戦艦四隻を含む四十五隻撃沈」と発表し、国民は提灯行列でアメリカ機動艦隊の全滅という大戦果を祝った。しかし、残敵掃討に向った日本艦隊はアメリカ空母機動部隊がまったく無傷であり、大戦果は誤りであることを確認したといわれる。

これに対して日本軍の損害は損失航空機三百十二機、帰還した飛行機のうち三百機は使用不能になったとされ、筆者のいた台湾虎尾航空隊も、筆者たちの卒業予科練習生が、その後実用機として搭乗すべき零戦、紫電などを失い、結果的に中練特攻という文字通りの海軍航空隊の最終の姿を露呈している。

筆者は、当時の指揮官の言葉として「九三中練で死ぬとは思わなかった」「九三中練とは、ちょっと情けないが我慢しよう」と記しているが、筆者たち中練に乗っていた者でさえ、最大時速二百

三十キロ、巡行速度百四十八キロのスピードで、まして二百五十キロの爆弾を抱いてヨタヨタと必死必中の中練で、どのくらいの戦果が上げられるかは疑問視していた、といわれている。

しかし高雄警備府は第三竜虎隊に出撃命令を下し、七月二十九日夜半から三十日未明にかけて沖縄沖に突入散華した。その戦果は駆逐艦撃沈、三隻損傷で、敵艦等はすでに沖縄戦が終決しており油断していたこと、そのうえ夜間速度の遅い羽布張り機でレーダーで捕捉出来なかったこともあり、敵のVT信管の対空砲火も磁器が働かず効果がなかったのだった。

筆者は最後に「しかし最後まで色々な悪条件を克服して目的を達成した七人の方々には頭が下がるばかりである。

もし戦争が長引いたら、私もこの人たちと同じく中練特攻隊員として敵艦隊に突っ込まなければならなかった」と中練特攻の思いを記している。